＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第 100 回関西スペイン語教授法ワークショップ(TADESKA) 開催の報告

C Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日時：2016 年 7 月 2 日（土）10:30 - 12:30

場所：関西学院大学梅田キャンパス(ハブスクエア)

1004 教室

担当者：江澤 照美

「GIDE(2015)『スペイン語学習のめやす』を利用して所要時間 20 分の教案を作る

-テーマ 9：体調と気分（『学習のめやす』 pp. 56-57, pp. 121-122）-」

＃＃＃＃＃＃＃

今回のワークショップでは、教案作成前の考察についてプレゼンをしたあと、20 分の模擬授業を実施した。プレゼンでは GIDE(2015)の目標を確認し、テーマ 9 に関する GIDE の提案を検証した。特に気になったのが、社会文化項目の設定内容である。日本のスペイン語入門レベルの学習者にとって医療現場に直接関係する語彙や表現は難易度が高すぎる。また、体調不良を訴えるための表現は非常に必要性が高いが、日本で自分の不調をスペイン語で訴える場面は想像しにくい／したくないため、学習者が積極的に覚える気になれないのではないかと危惧する面がある。

日本国内でのアクティビティについて言えば、体調が悪そうなスペイン語圏母語話者がいて、その人に「どうしたのですか？」とスペイン語で声をかけるという状況のほうが想定しやすい。声をかけられた相手が簡単な表現を使って述べる体調不良について理解し、そのつらさに共感するやりとりができるようになる、ということを今回の 20 分教案活動の目標とした。近年外国籍の居住者や観光客が増加した日本であれば、将来学習者が本当にどこかで体調の悪そうな外国籍の人に遭遇する可能性がある。入門レ

ベルの語学学習者でかつ医療の専門家ではない者が、医療現場で活動したり、医療に関する助言を与えたりするのはまだ無理かもしれないが、調子の悪そうな相手にまず自分から率先して ¿Qué pasa? と声をかけることや、簡単なスペイン語で励ましたり、病院に電話をかけるなどの手助けならできるだろう。自分のことばが十分に通じない場所で体調不良に陥った人の不安を少しでもやわらげるという、このテーマ９のアクティビティの意義を授業の最初と最後に述べることを推奨したい。そうすることによって学習者がテーマ９を学ぶモチベーションは高まるのではないだろうか。

プレゼンのあと、教案について簡単な説明をおこなった。通常は文法重視のテキストを使用しているスペイン語の授業で、今回はいつものテキストを使わずにこれまでに習った体の部分の語彙や体調をあらわす表現の復習をおこなう、という設定にした。その他、「このテーマを学習した後にできるようになること」や各項目について GIDE(2015)のテーマ９の提案を参考にしたが、担当者自身の考察を盛り込んだ点について簡単に紹介した。

そのあと、模擬授業を実施した。配付資料は 1）プレゼン全スライド印刷　2）教案（日本語版）と 3）ProfeDeELE.es（http://www.profedeele.es/2013/06/las-partes-del-cuerpo-humano.html）に掲載されていた Partes del cuerpo の画像の改変版(注：コミュニケーションギャップによるペアワークに利用)プリント 2 枚である。3)は今回のワークショップ出席者以外に配布するのは不適切と判断し、議事録掲載は見合わせる。また、教案(日本語版)は模擬授業後に改良のための見直しをおこなったため、本議事録には加筆修正版を掲載している。教案(スペイン語版)はこの日本語の加筆修正版をもとに新たに作成した。ただし、日本語版を忠実に翻訳したものではないこともお断りしておく。20 分教案という枠組み内での教案であるため加筆修正した日本語版教案には必ずしも取り入れていないが、ワークショップ当日に貴重なコメントをいただいた方々やアクティビティに取り組んでくださった参加者の皆様にお礼申しあげたい。